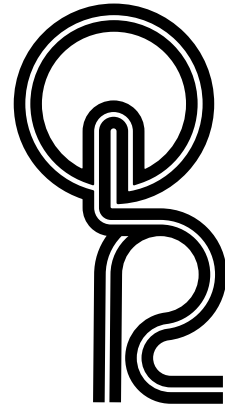


QR Newsletter

第四紀通信

Vol. 8 No. 5, 2001



Vol. 8 No. 5		October 1, 2001	
2001年日本第四紀学会論文賞	2	2001年度第1回評議員會議事録	10
鹿児島大会巡検報告	4	会計関連資料	14
研究委員会 2000年度活動報告	5	2001年度總會議事録	16
国際第四紀研究連合大会招致検討	7	幹事會議事録	17
前会長 米倉伸之先生追悼	8	会員消息	19
研究集会・研究助成情報	9	編集後記・新広報委員会	20

2001年日本第四紀学会論文賞

日本第四紀学会論文賞授賞候補者選考委員会(松下まり子委員長,赤羽貞幸,小野有五,那須孝悌,春成秀爾各委員)は,第四紀研究第38巻,第39巻の論文を対象に,独創性,論理性,発展性,学際性について慎重に審議した結果,次の2論文を授賞候補に選定し,これらの論文に決定いたしました。授賞理由と受賞者の抱負をここに掲載し,益々の研究の発展を期待いたします。

青木賢人「 ^{10}Be 露出年代法を用いた氷成堆積物の形成年代の測定」 第四紀研究, 第39巻第3号, 189-198頁, 2000

受賞者の言葉

受賞理由

この論文は,日本列島の第四紀氷河編年にとって重要な地域であり,これまでも多くの研究が行われてきた木曾山脈北部の千畳敷カール,濃ガ池カールにおいて,はじめてカール底に分布するターミナルモレーン上に露出する複数の巨礫に対して,宇宙線生成核種の一つである ^{10}Be (ベリリウム10)を用いた露出年代測定法を適用したもので,当地域のモレーンは最終氷期極相期に形成されたことが示された。AMS法やモレーン構成礫の風化皮膜の厚さを用いた相対年代法(WRT年代法)による年代測定もあわせて行われ,両者を比較することによって露出年代測定法の有効性も確かめられた。これによって,堆積物だけでなく,侵食地形を対象とした年代測定への道が開かれたことになり,今後の第四紀の氷河編年にとって大きな貢献となる。いくつかの問題はまだ残されているが,それらを解決するためにも,この方法を用いた測定が今後さまざまな場所で行われるべきである。そうした意味でも,新しい手法を意欲的に適用した青木賢人君の功績は大であり,今後の研究の進展が期待される。

青木賢人(北海道大学低温科学研究所)

このたびは第四紀学会論文賞を賜り,大変光栄に思っております。質量分析に関しては素人であった私に初歩からご指導くださった国立歴史民俗学博物館の今村峰雄先生のご協力なしに本研究を進めることはできませんでした。東京大学原子力総合研究センターのタンデム加速器での測定の際には小林紘一先生,日本大学の永井尚生先生には大変お世話になりました。また,私が第四紀研究に携わるきっかけを与えてくださった東京学芸大学の小泉武栄先生にも感謝いたします。

本論文は,氷成堆積物を構成する岩塊表面に生成した現地性宇宙線生成同位体の一つである ^{10}Be を用いて氷成堆積物の年代を測定し,中央アルプス木曾駒ヶ岳周辺の氷河地形発達史を復元することを目的としています。これまで,氷成堆積物の年

代測定には¹⁴C年代法のほか、テフロクロノロジーや風化皮膜法などの相対年代法が用いられてきましたが、高山帯という特殊環境にあるため堆積物の流亡が著しく、数値年代試料に基づいた議論が行われてこなかったという状態でした。一方、世界的には氷床コアや深海底コア、湖底コア、レス-古土壌シーケンスなどによる数値年代に基づいた高精度年代測定と古環境復元が行われ、氷河編年もそれと対応した「時間のものさし」を必要としていました。そこで本論文では堆積物に依存しない数値年代測定法を導入し、木曾山脈の氷河地形形成史を明らかにすることを試みました。本年代測定法は、近年欧米でも注目され、氷成堆積物の年代測定法の主流となりつつあります。早い時期に取り組み、それを評価していただいたことを大変うれしく思っています。今後は、より多くの氷河地形の年代を測定し、日本の氷期の氷河像を明らかにする研究を進めるとともに、これまで年代測定が制約となり議論が進められてこなかったさまざまな地形に本年代法を適用することを試みたいと思っています。

最後になりますが、本論文は東京大学理学系研究科地理学教室に提出しました私の博士論文の一部でした。博士論文の研究を進めるに当たっては東京大学名誉教授で日本第四紀学会前会長の故米倉伸之先生に終始ご指導いただきました。先生が亡くなる直前に論文受賞の報告をしたとき、大変喜んでくださったことが頭に残っています。改めて、先生に感謝したいと思います。

川村教一「香川県高松平野における沖積層の層序と堆積環境」第四紀研究、第39巻第6号、489-504頁、2000

受賞理由

日本各地の沖積平野における地下地質研究は、都市開発にともなうボーリング調査の進展と並行して行われてきた。高松平野でも、臨海部における都市開発にともないデータが蓄積し、地下地質の詳細な層序区分や地層の形成年代、地層の堆積環境を総合的に明らかにすることが課題となってきた。著者は単にボーリング資料を数多く集めるだけでなく、研究地に生活する地の利を生かし、掘削工事現場での露頭観察を軸に、地層の連続性、上下の地層の層序関係を確実におさえ、隣接するボーリング資料を関連づけ精度の高い断面図を描いた。この露頭観察や地層の分布状況に基づき平野の地層は、不整合を境に香東川累層と高松累層に、さらにそれらは岩相により細分された。この過程で香東川累層の福岡町泥層にはAT火山灰層が挟まれ、高松累層は¹⁴C年代測定値から6000年前以降の地層であることが明らかになった。高松累層の露頭や掘削土からは、おもに潮間帯～上部浅海帯の岩礁や砂礫～泥底に生息する253種の貝化石を採取し、層準ごとの種構成や産状を検討した結果、4群集型を認めVDM特性曲線から各時期の古水深を推定した。また高松累層

は、岩相や化石の産状、種構成から判断して、下位から縄文海進期のラビーンメント堆積物、内湾三角州底置層、内湾三角州前置層、縄文後期以降の三角州頂置層から構成されると推定した。さらに¹⁴C年代値とその資料を採取した標高とから堆積曲線を求め、各時期の古水深とを組み合わせて、6000年前以降の相対的海面変化史の復元を試みた。この研究は、地質層序を基礎にして堆積環境や堆積年代を推定し、相対的な海面変化を求めようと試みた研究であるが、幅広い分野の新しい成果を踏まえて総合的に沖積平野の形成史に取り組んだ第四紀学的研究である。完新世における相対的海面変化については今後、更なるデータの積み重ねによって、精度の高い変化史が組まれることを期待したい。

受賞者の言葉

川村教一（大阪市立大学大学院理学研究科）

このたびは、論文受賞の栄誉にあずかり、望外の喜びでございます。この論文は、初めて投稿した論文でした。この不出来な原稿を受理・印刷まで根気強くご指導くださいました。査読者、編集委員、編集書記の皆様方に心より御礼申し上げます。

さて、論文で扱った研究手法は古典的とも言えるもので目新しさはありません。人工露頭での観察を行い、ボーリングコアを収集し、貝類化石や微化石を同定し、広域火山灰との対比を行うなどで、沖積低地における地質調査の常套手段ともいえるものです。しかしながら、これらの研究手法を四国地方において平野の形成史説明のために適用した例は、まだまだ少ないと言わざるを得ません。私たちが住んでいる地下地質についてあまりにも知らなすぎると思っていた矢先、1995年の兵庫県南部地震で四国も揺れました。この地震を契機として、私は香川県における沖積低地の地下地質研究を始めました。今回の論文は、その初めての成果でした。

まだ、研究の端緒についたばかりですが、諸先輩方の研究成果を参考に、第四紀研究のさまざまな手法を駆使して、瀬戸内海、特に備讃瀬戸沿岸域に分布する平野の生い立ちを明らかにしたいと考えております。

末筆ながら、これまで私の研究活動にご理解をいただき、さまざまな形でご援助、ご指導を賜りました。地元企業各社、香川大学工学部、徳島大学総合科学部、徳島県立博物館の地質研究者の皆様方、そして大阪市立大学理学部の人類紀自然学研究室の皆様方に心より感謝申し上げます。

2001年日本第四紀学会大会巡検「薩摩半島南部(指宿地域)の遺跡とテフラ」参加報告

田口公則(神奈川県立生命の星・地球博物館)

2001年度の日本第四紀学会大会にあわせて、8月4日に標記の野外巡検が行なわれた。指宿地方をちょうど、指宿菜の花マラソンのコースを沿うようにぐるっと巡るものである。晴天の下、バスによる巡検は27名の参加者とともに成尾英仁(鹿児島県立博物館)、大木公彦(鹿児島大学総合研究博物館)両氏による案内によりスタートした。巡検地へ向かう車中では、火砕流堆積物を中心とした周辺の地質や鹿児島湾の特徴に関する話題、貝塚やあるいは照葉樹林、マングローブといった多岐にわたる説明があり車窓を一層楽しませて頂いた。

Stop 1(指宿市幸屋)は、幸屋火砕流堆積物と命名された、鬼界-アカホヤテフラの模式地である。その大きな露頭では、下位より入戸火砕流堆積物、湖成層、薩摩、アカホヤ、池田湖火砕流堆積物が観察される。ガス抜きパイプの観察のために案内者がねじり鎌で入戸火砕流と格闘。湖成層から上位は、露頭に近寄れずそれぞれ足元の転石ブロックを観察した。

Stop 2(池田湖)では、湖畔にて周囲の地形や火山などを観察。南薩地方には多くの火口湖が点在するが、池田湖は九州最大の湖である。水深は233mにも達し、湖底は海面下だという。対岸にはカルデラの縁に形成された鍋島岳が遠望できた。湖に生息しているオオウナギ(南では電柱ウナギと呼ぶほどの)へも話はずんだ。

開聞岳から鬼門平断層までの雄大な地形がひろがるStop 3(開聞町仙田)では、厚く堆積した池田湖火山灰層を観察。みごとにマントルベッティングした降下火山灰層を観ながら、層厚と活動期間の関係考えたり、火山豆石を含むウェットな火山灰という条件とは?等々に議論がおよんだ。

Stop 4(開聞町鏡池)は、道路際の直径100mほどのマールである。巡検案内書の表紙にもつかわれた湖面に映る開聞岳は絶好の被写体となった。その後、バスは薩摩一宮である枚聞神社付近で車中から開聞岳の地形を観察。山頂の溶岩ドームはA.D.885年の最後の噴火で形成されたというから驚く。平安の人々が開聞岳をどのように感じていたか思いをはせる。

開聞岳は縄文時代後期から噴火を開始している。黄コラ、灰コラ、青コラなどと呼ばれる、いわゆる“コラ”をはじめとする開聞岳の一連のテフラ噴出物を観察できるのがStop 5(開聞町川尻)である。幾重にも重なるコラとスコリアの層を前にコラの見分け方について考えたり、植物化石の産状について議論を交わした。何人かの参加者が植物化石のサンプリングを行っていたが、大学博物館の資料にと大きなブロックを抱えている大木先生の姿が印象的であった。日程も少し押し気味となり、Stop 6(山

川町伏目)の地熱発電所は、車中からやぐらを眺めるにとどまった。

Stop 7は「指宿市考古博物館・時遊館 COCCO はしむれ」である。昼食後、博物館の中摩浩太郎氏より展示解説を頂いた。時遊館 COCCO はしむれは、指宿市橋牟礼川遺跡に隣接した考古博物館である。橋牟礼川遺跡が「先史時代のポンペイ」と呼ばれたことから、イタリア語で「秘蔵っ子、宝物」という意味をもつCOCCOを館名に用いたという。相應しい名と感じる。展示は、様々な手法を取り入れながら指宿の火山をはじめとする自然や歴史の資料を紹介している。入口から展示縄文人と握手するコーナーがあり、博物館業界で話題となっている“ハンズ・オン”を感じさせる。自ら主体的に接することのできる展示が多いのである。考古博物館であるが、火山との関わりが強く、テフラのはぎ取り標本等も多い。特に、鹿児島ではなじみのあるシラス(入戸火砕流堆積物)のCG、すなわち始良カルデラ噴火の映像シュミレーションは新鮮であった。また、古墳時代の集落復元展示は圧巻である。当時の一日を実物大の集落で体感できる。自然環境や人々のくらしの音まで流れている。このような復元展示は出土資料や綿密な調査にの裏付けに基づくが、この復元展示スペースにはその解説が全くない。まさに自ら展示に身をおいて古墳時代を堪能できるのである。おそらく参加者の各人がそれぞれの興味関心で展示を体感したことだろう。

Stop 8(指宿市玉利)は、新しく削ったばかりの切り通しの露頭である。指宿火山群の前半の活動による清見岳テフラやそれを覆うATテフラ、鬼界アカホヤテフラ、池田湖テフラを明瞭に観察できる。色とりどりのテフラは純粋に美しい。露頭の保存検討中で本来の吹きつけ等の処理を止めているという。今後の保全の行方が気になる。

最後の見学地となるStop 9は、指宿市の水迫遺跡である。ここでは先の中摩浩太郎氏に加え同博物館の下山 覚氏および鎌田洋昭氏による遺跡の層位や住居跡等の案内を受けた。旧石器時代(約1万5千年前)の人々のくらしを知る上で重要な遺跡だという。注目されたのは“炉跡”や“道”の遺溝である。わずかな土色の差異から帯状に続く窪みが認められる。これは道か?予定時間を気にせず随所で議論が交わされた。普段、地学分野に身をおいている私にとって、遺跡の発掘はまさに人間活動の生痕化石の調査だと感じさせた。

今回の巡検は、四紀学会に相應しく当地の特徴である火山活動を軸とした幅広い領域の内容を含むものであった。入念な準備のもと、暑い中、多岐にわたるガイドをしてくださった案内者の方々ならびに関係者のみなさんに感謝申し上げます。

研究委員会 2000 年度活動報告

アジア太平洋層序研究委員会

(委員長：熊井久雄)

この研究委員会は INQUA の Subcommission on Quaternary Stratigraphy of Asia and Pacific Region 国内対応委員会として、96年の第四紀学会総会で承認されて以降、このSubcommissionの国内委員を中心として約30名の会員によって構成されています。最近の主たる事業は、1999年に南アフリカで開催された Subcommission のビジネスミーティングの際に策定された INQUA インターコングレスの研究計画にしたがって、東アジアの第四系高解像度対比とそれにもとづく古環境の地域的な相違の究明を行うための共同研究と討論会の開催です。その第一段階国内シンポとして、1999年9月に第四紀総合研究会と共催で、日本海沿岸の上部更新統の精密層序に関するシンポジウムを開催しました。このシンポジウムのポストプリントは第四紀総合研究会連絡誌「第四紀」No.32に特集されています。2000年度には、10月に第四紀総合研究会と共催で八ヶ岳山麓の第四系に関する巡検とシンポを開催しました。このシンポのポストプリントは第四紀総合研究会連絡誌「第四紀」No.33に特集号としてまとめられています。また、2001年10月には大阪市立大学国際シンポジウムの一環として、Subcommission on Quaternary Stratigraphy of Asia and Pacific Region のセッションを計画しています。最近恒例となっている第四紀総合研究会との共催のシンポジウムは10月6～8日に富士山麓で計画されています。

海面変化・海岸環境変遷研究委員会

(委員長：大村明雄)

この研究委員会は1999年8月にダーバンで開催された INQUA 大会において従来の“Commission on Quaternary Shorelines”をリニューアルして発足した“Commission on Sea Level Changes and Coastal Evolution (SLCCE)”の国内対応委員会です。とくに、前身委員会である「海岸線研究委員会」の活動内容を引き継ぎながら、今後は国内に限らず西太平洋域活動縁辺域に位置する国々との共同研究を視野に入れた活動を進めたいと考えています。

その目標達成に向け、2000年度は、1. 国立台湾大学地質学教室の Ping-Mei Liew 教授と SLCCE 副会長の太田陽子および同 Western Pacific Subcommission の大村明雄がオーガナイザーとして、本学会のネオテクトニクス研究委員会と共催する“First International Meeting on both Sea-level Changes and Coastal Evolution (INQUA) and Neotectonics (INQUA)”を本年10月17-24日に台北で開催する運びになりました。この間、本国際会議への参加呼び掛けを、第四紀通信, vol. 7, no. 3, p. 8-9 および vol. 8, no. 2, p. 9に掲載させていただくとともに、日本第四紀学会のホームページか

ら circular をダウンロードできるようにしていただきました。なお、会議期間中2日間の口頭およびポスター発表と会議後の4日間にわたる台湾東海岸・地震断層に関する巡検が計画されているため、本学会会員以外の方々にも参加を呼び掛けました。なお、外国からの参加希望者は、2月末までに50名に達しているとの情報があります。

2. 2000年度の国内における委員会活動は必ずしも活発ではなかったと反省していますが、前フィリピン大学客員教授の前田保夫氏が進められている同大学地質学教室の研究者とのフィリピン諸島における第四紀後期の海面変動および地殻変動に関する共同研究への本学会会員(名古屋大学、金沢大学および琉球大学関係者)による支援活動が結実し、同国の大学院生を初めとする若手研究者の間にこの種の研究が芽生え定着しつつあります。彼らの研究成果は上記国際会議で発表される予定です。現在東アジア各国の研究者と本研究委員会関連の共同研究を実施あるいは予定中の方からの御連絡をお待ちしています。

古土壌研究委員会(委員長：坂上寛一)

古土壌の研究手法や解析のために必要とする項目については、古土壌研究の先進国であるヨーロッパ諸国と我が国とでは、必ずしも同一とはならない。もちろん土壌の種類によっても異なってくるが、基本的には我が国の降水量の多い気象条件(乾期の欠如)による土壌構造の未発達、わが国の古土壌とヨーロッパ諸国の古土壌とが異なる最大要因の一つとしてあげられる。このような古土壌の成因やその研究アプローチの違いを、欧米の研究者との交流において認識しあうことが重要と考えており、個人的な段階ながら、下記のような機会を持った。

委員の坂上は2001年5月29日から6月4日までハンガリー国ブタペスト郊外の Szazhalombatta で “1st International Conference on Soils and Archaeology” に出席してきた。ホテルに缶詰での発表・論議と野外巡検での討論などを通して、古土壌解析について意見を交換してきた。ドイツ、ベルギー、ロシアなどヨーロッパ研究者主導のシンポジウムであったが、我々の火山灰古土壌についても一定の理解が得られた。今後一層の交流が必要と感ぜられた。また渡邊真紀子委員は毎年5月ないし6月にドイツ土壌学会主催で開かれる野外セミナーを中心とする活動に、1999年以来参加している。ヨーロッパにおける古土壌の代名詞である Bt 層(ステージ5eに相当)の成因の議論などをふまえて、古土壌研究の実質的な交流にまで展開させている。7月15日に府中市において、立川ローム期の古土壌巡検とミニシンポジウムを開催した。

ネオテクトニクス研究委員会

(委員長：奥村晃史)

ネオテクトニクス研究委員会は2000年1月29日の評議員会において設立を承認され、1999年度から2002年度までの4年間、断層・地震性地殻変動・

広域地殻変動などの研究に携わる日本の研究者の交流と国際的な情報発信を推進する目的としている。本委員会は1999年8月、ダーバンで開かれた国際第四紀研究連合第15回大会のネオテクトニクス研究委員会に参加した会員を中心に設立が準備された。大会後トルコ・台湾で起きた大地震の被害は第四紀テクトニクスの観点からの長期的地震危険度評価の重要性を改めて認識させるものであった。

2000年度の行事として、2001年5月12日・13日にフィールドワークショッパ「房総半島の地震地殻変動：新たな視点（オーガナイザー：宮内崇裕・苅谷愛彦・奥村晃史）」を開催した。5月12日午後千葉大学でシンポジウムを開催し、巡検案内者らによる7件の研究発表を行った。翌13日には、シンポジウムの議論の対象を発表者の案内によって現地を確認し議論を深めるための南房総巡検を実施した。案内者は藤原治（核燃料サイクル機構）、石田大輔（アジア航測(株)）、宍倉正展（産業技術総合研究所活断層研究センター）、参加者は研究者や学生のほか地元の高校教師など25名であった。館山・岩井・保田の海岸地形と堆積物からは、従来の沼面群の対比が成立しないことが示された。香における沼サンゴと海食洞の精査からは、完新世旧汀線指標が多数存在することが明らかとなり、津波堆積物にみられる数百年に1回の大地震との対応が検討された。1950年代に革新的なアイデアとして提示された、元禄タイプの地震の繰り返しによる4面の完新世海成段丘の離水・隆起モデルは、半世紀の後に根本的な見なおしを迫られている。2001年10月には台湾で、INQUAの海面変化およびネオテクトニクス両研究委員会主催の“The First International Meeting on both Sea-level changes and coastal evolution (INQUA) and Neotectonics (INQUA)”を開催される。本委員会も、この会議の準備に参加して国内への広報を進めている。

高精度¹⁴C年代測定研究委員会 (委員長：中村俊夫)

昨年の第四紀学会歴博大会におけるシンポジウム“21世紀の年代観 - 炭素年から暦年へ”およびその際に発信された“佐倉宣言”を受けて、国立歴史民俗博物館の辻 誠一郎と名古屋大学年代測定総合研究センターの中村俊夫を世話人として、年代の測定に携わる研究者や年代の利用者などが集まって共同して“高精度¹⁴C年代測定研究委員会”の設置を提案し、2000年度から設置が認められた。同委員会が設置されてからまだ半年足らずで、まだ具体的な活動は行っていない。今後の活動としては、まず、¹⁴C年代から暦年代への校正について、用語の統一を図るとともに、校正データの表示法の意味の理解などについて、特に、考古学研究者の意見を求めて、コンセンサスをはかる計画である。

参考までに、“佐倉宣言”の全文をここに掲載しておく。日本第四紀学会2000年歴博大会にて発信された「2000年佐倉宣言」背景「日本第四紀学会は放射性炭素の性質を利用した年代測定法の講習

会を開催するなど、年代測定法の技術的な向上と普及を推進してきた。しかし、測定法による違い、炭素年と暦年の違いについて誤解に基づく混乱が生じていることも事実である。こうした混乱を是正し、放射性炭素年代測定を一層推進することは、人類と環境の歴史を解明しようとする本学会の責務である。「宣言」日本第四紀学会は、より高い精度の放射性炭素年代の測定と暦編年を推進する。これを基礎に日本および東アジアの人類と環境の歴史を叙述し、その成果を世界に向けて発信する。この主旨の実現をはかるために、放射性炭素年代測定にかかわる特別の委員会などを組織し、用語の統一、およびこれまでの年代の枠組みの正確かつ適切な改訂を推進する。

テフラ・火山研究委員会（委員長：鈴木毅彦）

この研究委員会は、INQUA Commission on Tephrochronology (COT)に対応する委員会として1992-1999年度にかけて活動したテフラ研究委員会を継承したものである。COTが1995年INQUAベルリン大会でINQUA Commission for Tephrochronology and Volcanism (COTAV)に変更したのに伴い、テフラ研究委員会もテフラ・火山研究委員会と名称を改め、2000年度よりあらたな研究委員会として活動を開始した。活動目的は、COTAVに関連する情報を委員会のメンバーに伝達し、野外巡検を中心とした研究集会を行ない、最新の研究成果を内外の研究者間に紹介すると同時に交流の機会を与えるなどの活動を行なうことである。2000年度の活動は以下のとおりである。(1)2000年10月6日に第四紀研究連絡委員会との共催で、シンポジウム「明日のテフラ(火山灰)研究を考える：火山からのメッセージを解読する(日本学術会議)」を開催した(世話人：町田 洋・吉川周作・鈴木毅彦)。このシンポジウムのねらいは、火山学、地質学、古生物学、考古学、土壌学、地形学、年代学などきわめて多くの研究分野と深く関わって発展してきたテフラ(火山灰)研究の総括を行ない、新たな展望を開くことにある。15の話題提供が、基調報告、地域研究、方法論、第四紀学への応用の4部に分かれて行われた。参加者は約80名であった。詳細なシンポジウム報告は第四紀通信2000年6号に掲載されている。なお本シンポジウムの内容は、月刊地球(海洋出版社)に特集号として2001年以内に印刷される予定である。(2)2000年10月7日~10月9日に第8回テフラ研究委員会野外巡検「東北南部のテフロクロノロジー：火山フロント沿いの成層火山・大規模火砕流・前期旧石器編年問題」を開催した。案内者は、鈴木毅彦・早田 勉・八木浩司の3名、参加者は28名であった。野外観察とは別に、2日間にわたる夜間集会で3件の話題提供がなされた。詳細な報告は第四紀通信2000年6号に掲載されている。

国際第四紀研究連合 (INQUA) 大会招致の検討に関するワーキンググループ 会議報告とホームページのご案内

国際第四紀研究連合 (INQUA) 大会招致の検討に関するワーキンググループ会議を2000年になって2回開催(1回は拡大会議)し、開催の理念、開催地案と財政、今後の予定などを討議しました。鹿児島での大会の折、評議員会、総会で論議を深めるとともに、第四紀学会のホームページに会議報告を掲載して、学会会員の意見を広く聴取することを決めました。以下の内容が日本第四紀学会ホームページ(<http://www.soc.nacsis.ac.jp/qr/inquiry.html>)に掲載されています。

- 国際第四紀学連合 INQUA の大会を 2007 年に日本に招致する案について -

会員の方々のご意見をお寄せ下さい。

お届けいただいたご意見は第四紀研連委員長(町田 洋)が内容を確認した上で、第四紀学会ホームページに掲載して皆様に回覧する予定です。公開をご希望にならない方は、その旨電子メールの冒頭に明記してください。電子メールには氏名・所属(または住所)を記してください。上の青い文字をクリックするか、町田 洋 <QYP04721@nifty.ne.jp> および奥村晃史 <kojiok@hiroshima-u.ac.jp> の両方へ電子メールを送ってください。

日本学術会議第四紀研究連絡委員会では、第17期から、INQUA 大会招致検討ワーキンググループを組織し、検討して参りました。現在の第18期委員会にも引き継がれております。ご承知の通り、INQUA 日本招致準備には多大の熱意、労力と時間および経費が必要です。したがってこれを実現するには日本第四紀学会会員の皆様の絶大な支援がなければ不可能です。そこでこれについて概要を記し、ネット上で積極的なご意見をお伺いします。

INQUA 大会招致検討に関するワーキンググループ会議のこれまでの審議事項昨年までの詳細は昨年夏、「INQUA 日本大会招致の検討に関するワーキンググループからの報告とお願い」として報告しましたので、(第四紀通信7巻4号)、経緯 進行状況などについてはそれを参考にして下さい。ここでは概要の項目のみを記します。

1) 日本招致の主な理念

- a. 日本の第四紀研究と国際的環境諸科学プロジェクトとの密接な連携をはかり、国内および国際的研究の一層の進展を促す契機とする。
- b. とくに創立50周年を迎える日本の第四紀学・関連研究にとって一大発展の画期とする。
- c. 日本における第四紀研究および第四紀学会の国際

貢献度を向上させる。

2) 現在までの準備状況

- a. 過去のINQUA大会を参考にすると、日本での予想参加者数は800-1000名、主会場1、各テーマ会場約10、ポスター会場2-3を要する。本会議1週間、その前後に約1週間の巡検(国内・近隣諸国)、本会議中に日帰り巡検を催す。
- b. 主会場都市と大会の主テーマについては複数の案が出ている。招致に向けた準備委員会が組織された場合に、そこで決める。
- c. 予想される経費概算について、会場の選定とともに予備的に検討している。会議参加者800名と仮定した場合見積られる経費は、札幌、つくば、東京、大阪、神戸などでの会議施設等使用料および各自治体からの補助金には、きわめて大きな幅があることがわかった。登録費および学術会議、開催地自治体などからの補助金(数百万~1000万円)の収入などを見込んで、可能な場合を検討中である。

3) 当面の課題

- a. 「招致の可能性をさぐる検討委員会」の総括を経て、つぎの段階を迎える時期にあります。招致に積極的な日本の第四紀研究者が多いと判断できる場合には、研連での審議を経て開催準備委員会を組織し具体的な準備(開催地:主テーマ:資金などの計画)に入る必要があります。
- b. 当面、現在のWGメンバーおよびINQUAの委員会などの役員をしておられる日本人研究者が中心になって、基本構想を練って頂きます。
- c. 準備委員会には、第四紀学の将来を考え、若い研究者および現在会員でないが関連する分野の研究者にも呼び掛け、参加して貰うべきでしょう。
- d. 2003年アメリカでのINQUA大会で2007年の開催予定が決まります。それに向けてスケジュールを考える必要があります。

以上に関連することについて、ぜひ積極的なご意見をお聞かせ下さい。

参考: INQUA 招致の検討に関するワーキンググループ: 太田陽子, 小野 昭, 小野有五, 小池裕子, 熊井久雄, 斎藤文紀, 斎藤享治, 中村俊夫, 町田 洋, 米倉伸之

第18期第四紀研究連絡委員会委員: 赤羽貞幸, 海津正倫, 大村明雄, 小野 昭, 小泉 格, 坂上寛一, 斎藤享治, 斎藤文紀, 中村俊夫, 町田洋, 真野勝友, 米倉伸之, 吉川周作なお、この他にINQUAに関係の深い研究委員会、国際プロジェクトの関係者、招致に当たって協力を依頼したい組織の研究者などを加えて、拡大委員会が開催されております。

前会長米倉伸之先生のご逝去を悼む

日本第四紀学会前会長、米倉伸之先生は、2001年7月29日に入院中の都内の病院でご逝去されました。享年61歳でした。先生のご逝去に対し、ここに謹んで哀悼の意を捧げます。このたび、思いもかけない先生のご急逝の報に接したのは、先生が日本第四紀学会会長として開催を呼び掛けた鹿児島大会のわずか3日前でした。私どもは今だに信じられない気持ちでありますし、大会でも多くの会員の方々から先生のご逝去が、いかに日本第四紀学会にとって大きい損失であったかが語られていました。

先生は地形学や自然地理学、ことに第四紀学を一貫して探求されてきました。このことは、1965年に東京大学大学院数物系研究科地理学専門課程から地理学教室助手として採用されて以降、2000年3月に退官されるまで、ずっと東京大学地理学教室の教官として研究と教育に携わってきた経歴が如実に示しています。この間、49名もの博士論文を審査し、世に送り出しておられます。これらの方々の中には現在日本第四紀学会で中心的に活動している方が多く含まれています。その意味でも先生の第四紀学会への貢献は偉大でした。先生はまた、ご自分の研究成果を広く世に普及する面でも人一倍の努力家でした。亡くなる前の病床で執筆された「海と陸の間で」(古今書院)をはじめ多くの著書を送り出し、第四紀学の普及に尽くされました。

私達の日本第四紀学会では、1973年から1998年まで通算11期22年にわたって評議員として、またこの間、1973年から1992年まで通算5期10年にわたって幹事として学会の運営に尽力されてきました。1995年から1996年の副会長を経て、1997年から亡くなるまで会長としての重責を負ってこられました。ことに先生の場合は、このような第四紀学会内の活動のみに止まらず、第四紀学界を代表して、日本学術会議はじめ政府の専門委員としても活発な活動を続けてこられました。例えば日本の第四紀学の国際対応組織である学術会議の第四紀研究連絡委員会委員として、1988年から1997年まで努められました。この間、1994年からの3年間は委員長として国際第四紀学連合(INQUA)の日本を代表して、大会への準備や会議での討論に精力的にあたっておられました。このこともあって、自らも幾多の国際シンポジウムのお世話を手懸けられました。記憶に新しいところでは、1996年に開催された「第四紀環境変動国際シンポジウム」(東京大学)では、先生の綿密な計画と運営によって日本の第四紀学の国際的評価の向上と若手研究者の意欲昂進に多大な効果をもたらしました。

先生の研究活動のほんの一端を紹介しましたが、このような厳しく多忙な研究活動の傍ら、常に笑顔を決やさず、誰にでも温容な態度で接する先生には多くの方が魅了されました。先生のなき後私達日本第四紀学会会員一同、力を合わせ、先生のご遺志を継いで第四紀学の発展に尽くすことが先生の温情に報いる道かと思えます。今後の私達の活動をお見守りください。

日本第四紀学会 会長 熊井久雄

2001年活断層調査成果および堆積平野地下構造調査成果報告会

文部科学省では、地方自治体が平成12年度に実施した活断層調査、および平成10年度から平成12年度にかけて行った堆積平野地下構造調査の成果等を広く普及するため、2001年活断層調査成果および堆積平野地下構造調査成果報告会を開催します。報告会では発表の他、ポスターの展示などを行います。参加ご希望の方は下記の申込先までファックスまたははがきにてお申し込みください。

開催日：平成13年11月1日(木)、2日(金)

会場：こまばエミナース ホール (東京都目黒区大橋2-19-5)

主催：文部科学省

目的：地方自治体が実施する活断層調査及び堆積平野地下構造調査の成果等を発表し、これを広く普及させるとともに、専門家等の意見を今後の調査へ反映させることを目的として、成果報告会を開催する。

内容：

<報告会> 地方自治体が実施した活断層調査のうち、平成12年度で調査が終了した断層と平成13年度も調査継続中の断層の調査結果について、および地方自治体が平成10年度から平成12年度にかけて実施した堆積平野地下構造調査の調査結果について発表。

<ポスターセッション> 発表を行った調査についてのポスターセッションも行う。

なお、プログラム等詳しい内容につきましては、下記問い合わせ先までご連絡ください。

定員：500名(先着順) 参加費：無料

申込方法：ファックスまたははがきで、氏名、住所(勤務先又は自宅)、電話・ファックス番号、勤務先名を明記の上、下記までお送り下さい。10月29日(月)締め切り。

問い合わせ・申込先：〒101-0064 東京都千代田区猿楽町1-5-18 千代田本社ビル5階
(財)地震予知総合研究振興会 地震調査研究センター 活断層・地下構造報告会係
電話：03-3295-1501 FAX：03-3295-1507

“東海地震”防災セミナー2001[第18回]のお知らせ

昭和59年以来、毎年静岡市で開いてきましたが、本年も下記のとおり開催致します。関心をお持ちの方々のご参加を期待します。

日時：平成13年11月15日(木)13:30 - 16:00

会場：静岡商工会議所会館5階ホール(JR静岡駅北口西側)

テーマ：東海地震防災への新たな取り組み

座長：静岡大学名誉教授 土 隆一

1. 東海地震と周辺の火山活動 東京大学教授 井田 喜明
2. 東海地震のシナリオ - その現状と課題 - 東京大学名誉教授 溝上 恵

主催：東海地震防災研究会

連絡先：〒422-8035 静岡市宮竹1-9-24 土研究事務所 土 隆一

Tel.:054-238-3240 Fax:054-238-3241

財団法人昭和聖徳記念財団学術研究助成募集案内

目的：生物学に関する世界的学者としての昭和天皇の研究分野(系統分類学)およびそれに関する生物学の研究を奨励し、学術研究の推進・発展に寄与することを目的とします。

対象研究分野：系統分類に関する研究。

助成金：原則として1件当たり50万円以内。

研究助成期間：1年間(平成14年4月～平成15年3月)。

申請：財団所定の申請書を使用し下記あてに提出。申請締切日は平成13年12月10日(月)必着。

資格：原則として学術研究機関等に属している人、またはグループとします。グループの場合は代表者を明確にして下さい。

助成金交付：当財団の選考委員会により審査内定し、理事会で決定。申請者には文書により通知し、その後の1ヶ月以内に、予め定められた銀行等の口座へ助成金を振り込みます。

その他、義務・用途等については下記にお問い合わせ下さい。

提出・問合せ先：〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-5-1 新丸ビル

財団法人 昭和聖徳記念財団学術研究助成係

TEL 03-3211-2451(代) FAX 03-3211-7747

評議員会議事録 (2001 年度第 1 回)

日時：2001 年 8 月 1 日 18 時 -20 時

場所：鹿児島大学教育学部大会議室

議長：中田 高

出席：熊井久雄（会長），真野勝友（副会長），小野 昭（幹事長），坂上寛一，松浦秀治，上杉 陽，遠藤邦彦，町田 洋，菊地隆男，齋藤文紀，竹村恵二，松島義章，松田時彦，吉川周作，海津正倫，鈴木毅彦，中田 高，松下まり子，小田静夫，中村俊夫，陶野郁雄（以上評議員），委任状 20 通

大塚裕之大会実行委員長及び熊井久雄会長の挨拶の後，米倉伸之前会長が7月29日にご逝去されたことが報告された。前会長の告別式では鎮西清高元会長から甲辞が読まれた。中田 高評議員を議長に選出し，下記の報告及び審議が行われた。

最初に，2001年度の役員体制で，会長推薦幹事3名（河村善也行事幹事，海津正倫広報幹事，宮内崇裕渉外幹事）が提案され，承認された。2001-2002年度の役員については末尾の資料参照。

< 1 > 報告事項

1. 2000 年度 事業報告

1-1. 庶務

(1) 会員動向（2001年6月30日現在）：正会員 1792 名（うち，学生費会員 92 名，海外会員 20 名を含む），名誉会員 5 名，賛助会員 13 社，団体購読会員 105 団体，逝去会員 衣笠弘直，池辺展生，日高 稔，大角留吉，米倉伸之（2000年7月31日現在），正会員 1851 名（う

ち，学生費会員 181 名，海外会員 25 名を含む），名誉会員 5 名，賛助会員 12 社，団体購読会員 106 団体。

(2) 2000年度第1回評議員会を2000年8月24日に国立歴史民俗博物館において開催した。出席者 17 名，委任状 20 通。議長：春成秀爾。2000年総会を国立歴史民俗博物館において開催した。議長：坂上寛一。これらの詳細は，議事録として第四紀通信 7 巻 5 号に掲載した。2000年度第2回評議員会を2001年1月27日に筑波大学学校教育学部で開催した。出席者 20 名，委任状 15 通，議長：陶野郁雄。これらの詳細は第四紀通信 8 巻 2 号に掲載した。

(3) 引用許可の受付，会員名簿整理，寄贈図書の手付けを行った。

(4) 以下のシンポジウム・講演会等の後援，共催，協賛を行った。

北海道開拓記念館主催シンポジウム「フゴッペ洞窟シンポジウム：過去・現在・未来」（2000年11月18日～20日）の後援。第14回国際オストラコーダシンポジウム「21世紀のオストラコーダ学に向けて」（2001年8月1日～4日）の後援。日本粘土学会からの「第45回科学討論会平成13年9月13-14日，東洋大学朝霞キャンパス」の共催。ESR応用計測研究会 池谷元何幹事からの国際シンポジウム「ESR放射線量計測と年代測定の新戦略」国際シンポジウム（兼、第17回ESR応用計測研究発表会）International Symposium on New Strategy of ESR Dosimetry and Dating，2001年10月25日（木）-27日（土）の協賛。

日本地形学連合から第5回国際地形学会議（5th International Conference on Geomorphology）の後援。NHK，NHK プロモーション，国立科学博物館主催のNHKスペシャル関連企画「日本人はるかな旅」展（13年9月18日～11月11日）の後援

ENVIRONMENTAL IMPACTS OF VOLCANIC ERUPTIONS -January 2002

Convenors:

Bill McGuire (UCL), John Grattan (Univ. of Wales, Aberystwyth) and Paul Cole (Univ. of Luton)

The impact of volcanoes on the environment is both ubiquitous and wide-ranging. Weather, air quality, soil acidification, water quality, crop viability, human health, atmospheric chemistry, global climate and human activities may all be affected by volcanic activity. Papers are invited on all aspects of the relationship between volcanoes and the human and natural environment. It is hoped that the session will incorporate a broad spectrum of perspectives, from volcanic hazard impacts, through ecosystem and human culture response, to acid rain, non-eruptive degassing, global climate change and super-eruptions.

ABSTRACTS (maximum length 300 words) should be sent to: Professor Bill McGuire
at: w.mcguire@ucl.ac.uk indicating whether an oral or poster presentation is preferred

SPECIAL VOLUME: A special volume of full-length papers based around the theme of the session is planned. When submitting an abstract please indicate whether or not you would be interested in contributing a paper

VMSG2002 will be held at UNIVERSITY COLLEGE LONDON on January 3rd and 4th 2002. Other sessions at the meeting are: Lava flows on the Earth & Other Planets, Magma Formation in the Crust & Mantle, and Research in Progress.

FOR FURTHER INFORMATION GO TO: <http://www.bghrc.com/vmsg.htm>

- (5) 大学評価委員会専門委員及び評価委員候補者の推薦に関して、8月21日までに推薦するよう大学評価点学位授与機構から連絡が有り、会長・幹事長とも相談した結果、会長と副会長の2名を専門委員候補として提出した。
- (6) 日本学術会議第18期各研究連絡委員会等への委員の選出を行った。第四紀研究連絡委員会：小泉 格・斎藤文紀・真野勝友・吉川周作（以上地質古生物）、海津正倫・町田 洋（地理）、小野 昭（考古人類）、坂上寛一（土壤動物植物）、中村俊夫（地化地物工学）。古生物研究連絡委員会：小泉 格、辻 誠一郎また、土壤・肥料・植物栄養学研究連絡委員会から「土壤科学小委員会」への参加の呼びかけがあり、これに賛同することにし、坂上寛一会員を委員として選出した。
- (7) 2001年日本第四紀学会論文賞に向けて、推薦論文の募集を第四紀通信に掲載準備し、論文賞選考委員の選挙を行った。米倉伸之会長から推薦された11名の候補者に対して、評議員による選挙を行った結果、以下の5名が候補者として選出された。赤羽貞幸、小野有五、那須孝悌、松下まり子、春成秀爾。互選の結果、松下まり子会員が委員長に就任した。委員会は6月に会合を設けて選考を行ない、2名の授賞者を決定した。
- (8) 研究委員会の募集を第四紀通信を通じて行い、以下の2件の申請があり、第2回評議員会で承認された。
1. テフラ・火山研究委員会：2000年度～2003年度（4年間）代表者：鈴木毅彦
 2. 高精度¹⁴C年代測定研究委員会 2000年度～2003年度（4年間）代表者：中村俊夫
- (9) 学生会員届の提出について：就職後も学生・院生として登録され、正会員の年会費を支払っていない会員が多いことから、2000年度から学生・院生は、毎年学生会員届（学生会員継続届）を学会事務センターに提出してもらうことにした。なお、未提出の会員は、正会員へ移行する予定である。
- (10) 会費滞納者の処遇に関して：3ヶ年以上の会費滞納者に関しては、12月に、会員として継続を希望するか、また除籍を希望するか、等の問い合わせを行い、回答がない場合と除籍希望に対し、第2回の評議員会で会則第7条に従い、除籍した。
- (11) 選挙管理委員会：選挙管理委員会を組織し、その運営を行った。委員は幹事会より推薦された、奥田昌明、金井慎司、須貝俊彦、塚本すみ子、山田周二、吉岡敏和の各会員で構成され、互選により吉岡敏和会員が委員長に就任した。評議員選挙は全会員を有権者にして投票が行われ、5月19日の開票で46名の評議員が選出された。次いで新評議員を有権者にした役員選挙が行われ、6月23日の開票で、会長に熊井久雄、副会長に真野勝友、会計監査に坂上寛一、松浦秀治、幹事に鈴木毅彦、小野 昭、福澤仁之、山崎晴雄、小田静夫、竹村恵二の各会員が選出された。

1-2. 編集

- (1) 「第四紀研究」第39巻5号（原著論文4編、短報3編、書評1編、78頁）、6号（原著論文6編、短報1編、INQUA Perspective、96頁）、40巻1号（原著論文4編、短報3編、84頁）、2号（原著論文、7編、書評2編、86頁）、3号（原著論文3編、短報2編、ミニシンポジウム特集9編、書評1編、124頁）、4号（原著論文3編、短報3編、書評1編、60頁）の合計528頁を刊行した。(2) 6月23日現在、すでに受理済みの論文は7編で、40巻5号以降に順次掲載予定である。審査中の論文は36編である。2000年大会の特集号の編集は進行中である。
- ## 1-3. 行事
- (1) 2000年大会（総会、プレシンポジウム、シンポジウム、一般研究発表、懇親会、巡検、普及講演会）を千葉中央博物館及び国立歴史民俗博物館にて2000年8月23～27日に開催した。23日は千葉中央博物館にてプレシンポジウム「房総半島の第四紀 - 地層・地形から読む海水準変動とテクトニクス」（オーガナイザー：岡崎浩子・江口誠一・奥田昌明）（話題提供11件）を実施し、24～25日は、国立歴史民俗博物館にて一般研究発表（口頭発表41件、ポスター発表28件）、評議員会、総会、懇親会を行った。26日は、シンポジウム「21世紀の年代観 - 炭素年から暦年へ」（オーガナイザー：春成秀爾・今村峯雄・中村俊夫・辻 誠一郎）（話題提供8件）を実施し、シンポジウムの合間に国立歴史民俗博物館長佐原 眞氏による普及講演「考古学の年代」を行った。27日は、巡検「地層から読む海水準変動とテクトニクス」（案内者：岡崎浩子・中里裕臣・佐藤弘幸）を行った。23日のプレシンポジウムの登録者は141名（内会員79名、非会員62名）、24～26日における登録者は、279名（内会員195名、非会員84名）であった。懇親会参加者85名、巡検参加者は、案内者6名を含めて38名であった。要旨集287冊、巡検資料集5冊、またシンポジウムの内容に合わせて準備した「先史時代の¹⁴C年代資料集」660冊を販売した。
- (2) 2001年地球惑星科学関連学会合同大会（6月4～8日に国立オリンピック記念青少年総合センターで開催）で、学会提案のセッション「第四紀」（オーガナイザー：鈴木毅彦・中村俊夫）を6月6日の午前に行った。口頭発表が10件、ポスター発表が11件あり、同セッションへの参加者は約50名であった。また、地質学会、地震学会、火山学会などから提案のあった「古気候・古海洋変動」、「堆積物と堆積作用」、「地球年代学」、「活断層と古地震」、「長期火成活動と火山発達史」の5つのセッションを共催した。
- (3) 日本第四紀学会2001年大会の総会、シンポジウム、普及講演会、巡検等の準備を行った。大会は、2001年8月1～4日に鹿児島大学で行われる（実行委員長：大塚裕之）。1～2日に評議員会、一般研究発表会、総会、懇親会、3日にシンポジウム「南九州における縄文早期の環境変遷」（オーガナイザー：小林哲夫・森脇 広）を予定している。4日には午後から、小田静夫、堀田 満、大塚裕之の3氏による普及講演会「第四紀の自然と人間 - 琉球から南九州へかけての植物・動物・ヒトを結ぶ道」及び総合討論（司会：小池裕子）を計画している。この普及講演会の開催のために、文部科学省平成13年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」（研究成果公開発表（B））を申請し、交付内定を得ている。また、4日はシンポジウムの内容に関連させて、巡検「薩摩半島南部（指宿地域）の遺跡とテフラ」（案内者：成尾英仁・大木公彦ほか）を準備中である。
- (4) 日本第四紀学会2002年大会の会場選定を行い、信州大学理学部に打診を行い、内諾を得た。シンポジウム、

巡検及び普及講演会のテーマを検討中である。

1-4. 企画

- (1) 日本第四紀学会ミニシンポジウムを2001年1月に企画していたが、関連するテーマで問題が生じたため取り下げた。

1-5. 広報

- (1) 「第四紀通信 (QR Newsletter)」Vol.7 No.5 (2000年10月), Vol.7 No.6 (2001年12月), Vol.8 No.1 (2001年2月), Vol.8 No.2 (2001年4月), Vol.8 No.3 (2001年6月), Vol.8 No.4 (2001年7月) を刊行した。
 (2) 文部省学術情報センターネット WWW サーバ上の日本第四紀学会ホームページを通じて広報を行った。

1-6. 渉外

- (1) 地球惑星科学関連学会
 ・2001年合同大会において、第四紀学会としてセッション「第四紀」を応募し採用された。また、今回初参加の地質学会より複数セッションの共催希望申入れがあり受諾した。運営機構によれば、2001年合同大会の参加者は一昨年並であったが、事前登録者は一昨年に比べ600名程、投稿数は一昨年より300程増加した。
 ・2002年合同大会は、従来同様国立オリンピック記念青少年総合センターを予定。参加費・投稿料は2001年大会から変更無し。その他、学部学生の見学参加の取扱い、1日参加費の設定、アルバイト学生の参加費、高齢者の参加費取り扱いなどが検討されている。各登録システムに関してはシステムの不具合とインターフェイスの改善を行う予定。また、運営機構については、2002年大会は2001年大会とほぼ同様のメンバーで運営するが、将来を見越して各学会への積極的な参加が呼びかけられている。
 ・運営機構と連絡会の関係について、現在の規約の中でLOCと運営機構を読み替えて適用する事が了承されているが、第23回連絡会において連絡会経費の運営を運営機構に委託することが了承された。連絡会は運営機構の会計運営に対して、監査を行うため2名の監査を選出することとなった。また、6月8日の拡大連絡会で次期連絡会幹事の選出があった。新幹事は以下のとおり。会長：浦辺徹郎 (地質学会)、庶務渉外担当幹事：今井亮 (資源地質学会)、篠原雅尚 (日本地震学会・留任)、会計監事：近藤昭彦 (水文・水資源学会)、鈴木毅彦 (日本第四紀学会・留任)、ニュースレター担当幹事：青木元 (日本地震学会)

(2) 自然史学会連合

- ・学会連合総会が2000年10月14日に国立科学博物館新宿分館で開催された。決算・執行状況が報告され、予算案、地域博物館アクションプランに関する審議・議論がなされた。また、総会後にシンポジウム「21世紀の自然史科学における画像データベース」(分館・研修研究館)が開催された。
 ・ブラックバスに関する要望書を2001年2月19日付けで農水相と水産庁長官宛てに提出。内容は水産庁によるブラックバス類の規制緩和に反対するもので、水生生物の多様性保全を念頭においた運動である。連合事務局によれば規制緩和反対運動が大きな効果を上げつつあるとのこと。水産庁・農水省からの明確な政策の

意志表示はないが、連合が連絡をとった各マスコミの手で保護の重要性を唱える立場が広く報道され、中央省庁、自治体の各レベルでこの問題を再度重要視して考えていこうという流れが生まれつつあるとのこと。

- ・連合シンポジウム『遺体が語る自然史』(2001年11月10日国立科学博物館新宿分館講堂)の開催連絡。
- ・2000年末からの学術会議で第18期の活動が始まり、自然史学会連合の森脇和郎代表が第4部の会員を継続、遠藤秀紀氏が動物科学研究連絡委員会の委員に就任。主な運動内容としては、地域博物館アクションプラン、学芸員の研究環境改善、博物館研究者に科学研究費申請資格を広げることなど。

2. 2000年度決算報告・会計監査報告 資料参照

松浦秀治旧会計幹事から別添資料に基づき決算報告があった。引き続き上杉 陽、松島義章会計監査から予算の執行、帳簿・証票の整理などが正常適切に処理されていることが報告があった。また口頭で、予算はかなり厳しい状況であり、2006年の50周年、2007年のINQUAを考慮すれば、会費の値上げを検討する必要があることが指摘された。

3. 研究委員会報告

詳細は、研究委員会報告記事を参照して下さい。

4. 日本学術会議第四紀研究委員会報告

町田 洋委員長から次の報告があった。今年になって、2回委員会を開催した(2月,6月)。主な報告・議題:

- (1) 第4部における研連の見直し:新しい研究分野に対応した研連をつくるために、既存の研連の統合再編・定員の供出が要請されている。これに関連して第4部長から各会員に対し、研連見直しの現状について報告が求められた。第四紀研連ではまだ結論を得るに至っていない。また地質学総合研連より地球科学分野再編についての一つの案が出された。第四紀研連については、非推薦研連であるため、専門委員会とする案であった。第四紀研連では審議の結果、次の意向を申し入れた。
 ・再編に当たっては、従来の枠組みにとらわれず、21世紀の科学のあり方から考えていく必要がある。第四紀学は、単なる第四紀の地史研究ではなく、横断的・総合的に自然環境と人類の関係を展望する科学としての位置付けを再確認する。
 ・国際対応と研連との関係を統一的に扱う必要がある。
 ・推薦研連、非推薦研連のシステムを見直す必要がある。
- (2) 研連主催で次のシンポジウムが開かれ、約50-60名の参加があった。日本人と日本文化の源流 - 日本先史時代の自然と文化的環境 - 日時:7月27日(金)10時~16時30分、場所:日本学術会議講堂(営団地下鉄千代田線「乃木坂駅」5番出口 徒歩1分)、プログラム - 1000-1010:あいさつ(研連委員長 町田 洋, 東京都立大学・名誉教授), 1010-1040:自然環境の変遷復元(小泉 格, 北海道大学・名誉教授), 1040-1110:水田稲作農耕による食生活・生業形態の変化(米田 穰, 国立環境研究所), 1110-1140:日本列島における栽培植物の起原と渡来(佐藤洋一郎, 静岡大学), 1140-1300:昼休み, 1300-1330:人骨形態から見た日本人の起原と形成(馬場悠男, 国立科学博物館), 1330-1400:古人骨DNAから探る日本人の起原(植

- 田信太郎, 東京大学大学院), 1400-1430: HLA 遺伝子群からみた日本人の形成 (徳永勝士, 東京大学大学院), 1430-1445: 休息, 1445-1515: 抜歯風習からみた日本文化の起原 (春成秀爾, 国立歴史民俗博物館), 1515-1545: 黒潮圏の石器文化 (小田静夫, 東京都教育庁), 1545-1630: パネル討論・質議応答 (馬場悠男・春成秀爾・小泉 格), (世話人代表 小泉 格)
- (3) INQUA2007 招致検討問題: 現状は出直しの段階で, 中心になる集団の確保を目指している。また組織委員会, 財政, 会場, 事務機構, 科学プログラムなどについて, 互いに緊密な連絡を取れる組織づくりが必要である。また個々の負担を軽減できる協力体制の検討も必要であることなどを議論した。後記の WG 報告を参照されたい。
- (4) その他: JABEE (日本技術者教育認定機構) について若干意見を交換した。JABEE はいままで「資源」関係を中心にしているが, 第四紀学会としてはその中に「環境」をどのように組み込むか, が重要である。日本第四紀学会の幹事会で議論する必要がある。

5. 論文賞選考過程報告

論文賞授賞候補者選考委員会の松下まり子委員長から 2001 年日本第四紀学会論文賞の選考結果の報告があった (詳細は本号の 2-3 ページに掲載, また末尾の資料参照)

6. その他報告事項 特になし

< 2 > 審議事項

以下の事業計画が審議され, 承認された。

1. 2001 年度事業計画

1-1. 庶務

(1) 研究委員会に関して

- 以下の 6 委員会から届いている 2001 年度の継続希望が, 審議の結果承認された。アジア太平洋層序研究委員会: 1996-1999 年度: 助成金交付・2000-2002 年度: 交付なし継続, 代表者名: 熊井久雄, 海面変化・海岸環境変遷研究委員会: 1999 ~ 2002 年度 (4 年間) 代表者: 大村明雄, 古土壌研究委員会: 1999 ~ 2002 年度 (4 年間) 代表者: 坂上寛一, ネオテクトニクス研究委員会: 1999 ~ 2002 年度 (4 年間) 代表者名: 奥村晃史, 高精度 14C 年代測定研究委員会: 2000 ~ 2003 年度 (4 年間) 代表者: 中村俊夫, テフラ・火山研究委員会: 2000 年度 ~ 2003 年度 (4 年間) 代表者: 鈴木毅彦。
- (2) 論文賞授賞候補者選考委員会を組織し, その運営を行なう。
- (3) 投票率の向上などを目指して選挙制度の改善に関する検討を行なう。
- (4) 財政健全化のための諸施策を検討する。
- (5) 学会受け入れ図書 of 整理を行なう。また管理についての検討を行なう。

1-2. 編集

- (1) 「第四紀研究」第 40 巻 5 号, 6 号, 41 巻 1 号, 2 号, 3 号, 4 号を編集し, 定期刊行する。2000 年大会のシンポジウム特集号を 40 巻に刊行する。

- (2) 2001 年大会シンポジウム特集号編集委員会を設置し, 企画・編集にあたる。
- (3) 6 号化にともなう課題を整理して, 編集体制・運営や規定・内規などの見直しをすすめる。

1-3. 行事

- (1) 2002 年 6 月に国立オリンピック記念青少年総合センターで開催予定の 2002 年地球惑星科学関連学会合同大会に参加するための準備を行う。
- (2) 2002 年大会は, 2002 年 8 月 23 日 (金) ~ 26 日 (月) の日程で, 総会, 一般研究発表, 普及講演会, シンポジウム, 野外見学会などを開催する準備を進めている (実行委員長: 赤羽貞幸, 実行委員: 公文富士夫, 三宅康幸, 及川輝樹)。主会場は長野県松本市の信州大学理学部を予定している。シンポジウムについては, 山岳地である信州の特色を生かして「山岳地の形成と自然環境の変遷 (仮題) のテーマで企画がすすめられている。普及講演会は, 活断層と地震災害 (牛伏寺 (ゴフクジ) 断層をめぐる話題?) あるいは地球温暖化などの気候変動をテーマとすることが検討されている。野外見学会としては, 信州に分布する縄文遺跡, テフラおよび山岳地形 (氷河地形, 氷河堆積物) などを対象とした複数のコースが検討されている。
- (3) 2003 年日本第四紀学会大会の開催地を選定する。

1-4. 企画

- (1) ミニ・シンポジウムを 2002 年 1 月に開催する方向で検討準備する。また技術講習会などを企画する。

1-5. 広報

- (1) 「第四紀通信 (QR Newsletter)」Vol.8 Nos.5, 6, Vol.9 Nos. 1, 2, 3, 4 を定期刊行する。
- (2) 文部省学術情報センターのインターネット WWW サーバ上の日本第四紀学会ホームページで情報の発信を継続する。
- (3) 電子メールを用いた会員への情報配信を検討する。

1-6. 渉外

- (1) 地球惑星科学関連学会については今後も合同大会においてセッションを設けるなど, 参加予定である。
- (2) 第四紀学会としては, 加盟学会連合である自然史学会連合, 地質科学関連学協会, 地球環境科学関連学会協議会に積極的に参加し, その活動の一翼を担う予定である。

2. 2001 年度予算案 資料参照

松浦秀治旧会計幹事から説明があり, 予算はたっているが財政的にはかなり厳しいことが報告された。

3. その他の審議事項

INQUA2007 年の日本招致に関して昨今の状況が報告され意見が交わされた。

資料 (1) 2000年度収支決算報告書
(2000年8月1日から2001年6月30日)

収入の部

科 目	予算額	決算額	増減	摘 要
会費	13,108,500	13,563,400	454,900	
正会員	11,808,500	12,173,400	364,900	通常会員(過年度)会費 11,612,000円(819,000円) 学生会員会費 427,000円 海外会員会費 134,400円
賛助会員	300,000	300,000	0	
団体会員	1,000,000	1,090,000	90,000	
誌代	1,700,000	2,017,002	317,002	Back No. , 定期雑誌仕入, 露頭集売上, 予稿集売上
別刷代・超過頁代収入	600,000	444,049	-155,951	
雑収入	600,000	239,336	-360,664	佐倉大会収支残金, JICST, 研究委員会助成金戻収入
利子収入	20,000	16,265	-3,735	普通預金, 定期預金, 金銭信託, 貸付信託
役員選挙積立金取崩	300,000	300,000	0	
名簿作成積立金取崩	600,000	0	-600,000	
収入合計	16,928,500	16,580,052	-348,448	
前期繰越金	2,485,559	2,485,559	0	
合計	19,414,059	19,065,611	-348,448	

支出の部

科 目	予算額	決算額	増減	摘 要
会誌発行費	7,200,000	7,303,357	-103,357	第四紀研究 39巻4号～40巻3号 計6号
印刷費	4,100,000	4,308,360	-208,360	
編集費	2,500,000	2,428,312	71,688	
別刷印刷費	600,000	566,685	33,315	第四紀研究 39巻4号～40巻3号 計6号
会誌発送費	1,100,000	1,133,203	-33,203	第四紀研究 39巻4号～40巻3号 計6号
会報発行費	650,000	610,365	39,635	第四紀通信 7巻4号～8巻3号 計6通信
大会運営準備金	400,000	400,000	0	2001年用(鹿児島大学)
巡検準備金	100,000	100,000	0	2001年用(鹿児島大学)
講演会・シンポジウム費	100,000	0	100,000	
予稿集印刷費	550,000	413,070	136,930	2000年佐倉大会講演要旨集 350冊
学会賞費	120,000	111,135	8,865	副賞(50,000円×2名), 賞状筆耕代
講習会費	100,000	0	100,000	
通信費	350,000	350,625	-625	会費請求書発送郵税等
会議費	50,000	15,724	34,276	会計監査会議室使用料等
旅費・交通費	400,000	326,100	73,900	幹事会旅費等
印刷費	150,000	94,349	55,651	総会資料, コピー代
業務委託費	3,411,109	3,616,704	-205,595	資料 (5) 参照
特別刊行物編集費	0	0	0	
INQUA対策費	0	0	0	
役員選挙費	600,000	612,342	-12,342	2001-2002年度評議員・役員選挙費用
名簿作成費	1,000,000	0	1,000,000	2001年度精算
名簿発送費	570,000	0	570,000	2001年度精算
INQUA対策積立金	100,000	100,000	0	
役員選挙費積立金	0	0	0	
名簿作成積立金	0	0	0	
予備費積立金	1,000,000	0	1,000,000	2001年会員名簿作成費へ充当
研究委員会助成金	160,000	160,000	0	40,000円×4委員会
加盟学協会分担金	20,000	20,000	0	
雑費	150,000	134,005	15,995	慶事費, 各種手数料等
予備費	50,000	0	50,000	
支出合計	18,331,109	15,500,979	2,830,130	
次期繰越金	1,082,950	3,564,632	-2,481,682	
合計	19,414,059	19,065,611	348,448	

資料 (4) 2001年度予算案

(2001年8月1日から2002年7月31日)

収入の部

科目	2001年予算案	2000年決算額	2000年予算案	摘 要
会費	13,372,600	13,563,400	13,108,500	
正会員	12,052,600	12,173,400	11,808,500	7,000円×1,680名×98%+(学生 5,000円×92名×93%)+(海外会員 100,000円)
賛助会員	320,000	300,000	300,000	20,000円×13社(16口)
団体会員	1,000,000	1,090,000	1,000,000	10,000円×105団体×95%
誌代	1,700,000	2,017,002	1,700,000	Back No, 定期雑誌仕入, 予稿集売上等
別刷・超過頁代収入	500,000	444,049	600,000	
雑収入	500,000	239,336	600,000	2001年会員名簿広告料, JICST等
利子収入	16,000	16,265	20,000	
役員選挙積立金取崩	0	300,000	300,000	
名簿作成積立金取崩	600,000	0	600,000	
INQUA積立金取崩	0	0	0	
収入合計	16,688,600	16,580,052	16,928,500	
前期繰越金	3,564,632	2,485,559	2,485,559	
合計	20,253,232	19,065,611	19,414,059	

支出の部

科目	2001年予算案	2000年決算額	2000年予算案	摘 要
会誌発行費	7,300,000	7,303,357	7,200,000	第四紀研究 40巻4号~41巻3号
印刷費	4,200,000	4,308,360	4,100,000	計6号
編集費	2,500,000	2,428,312	2,500,000	
別刷印刷費	600,000	566,685	600,000	
会誌・会報発送費	1,300,000	1,133,203	1,100,000	第四紀研究 40巻4号~41巻3号
会報発行費	650,000	610,365	650,000	第四紀通信 8巻4号~9巻3号
会報発送費	170,000	0	0	第四紀通信第8巻4号分
大会運営準備金	400,000	400,000	400,000	2002年用(信州大学)
巡検準備金	100,000	100,000	100,000	2002年用(信州大学)
講演会・シンポジウム費	100,000	0	100,000	
予稿集印刷費	500,000	413,070	550,000	
学会賞費	120,000	111,135	120,000	副賞(50,000円×2名), 賞状筆耕代
講習会費	100,000	0	100,000	
通信費	350,000	350,625	350,000	会費請求書発送郵税, 事務通信費等
会議費	50,000	15,724	50,000	評議員会会議費等
旅費・交通費	400,000	326,100	400,000	幹事会等交通費
印刷費	150,000	94,349	150,000	総会資料印刷, コピー代金
業務委託費	3,454,999	3,616,704	3,411,109	資料(6)参照
特別刊行物編集費	0	0	0	
INQUA対策費	0	0	0	
役員選挙費	0	612,342	600,000	
名簿作成費	1,800,000	0	1,000,000	本来は2000年度に支出
名簿発送費	0	0	570,000	学会誌付録として発送
INQUA対策積立金	100,000	100,000	100,000	
役員選挙費積立金	300,000	0	0	
名簿作成積立金	500,000	0	0	
予備費積立金	1,000,000	0	1,000,000	
研究委員会助成金	200,000	160,000	160,000	40,000円×5委員会
加盟学協会分担金	20,000	20,000	20,000	自然史学会連合
雑費	150,000	134,005	150,000	
予備費	50,000	0	50,000	
支出合計	19,264,999	15,500,979	18,331,109	
次期繰越金	988,233	3,564,632	1,082,950	
合計	20,253,232	19,065,611	19,414,059	

資料 (2) 貸借対照表

貸借対照表

(2001年6月30日現在) (単位:円)

借方		貸方	
科目	金額	科目	金額
流動資産		流動負債	
預け金	1,760,761	未払費用	1,316,867
小口現金	119,628	前受会費	7,779,854
普通預金	391,893	INQUA積立金	300,000
定期預金	4,900,000	名簿作成積立金	600,000
金銭信託	8,210,371	予備費積立金	4,000,000
貸付信託	2,000,000	小計	13,996,721
前払費用	178,700	前期繰越金	2,485,559
		当年度剰余金	1,079,073
		(次期繰越金) 計	3,564,632
合計	17,561,353	合計	17,561,353

財産目録

(2001年6月30日現在)

資産の部

(単位:円)

科目	摘要	金額
預け金	財団法人日本学会事務センター	1,760,761
小口現金	編集書記手許金	119,628
普通預金	中央三井信託銀行日本橋営業部	391,893
定期預金	中央三井信託銀行日本橋営業部	4,900,000
金銭信託	中央三井信託銀行日本橋営業部	8,210,371
貸付信託	中央三井信託銀行日本橋営業部	2,000,000
前払費用	2000年度第1回目編集費送金	178,700
合計		17,561,353

負債の部

(単位:円)

科目	摘要	金額
未払費用	印刷費等*	1,131,747
	平成12年度幹事会交通費	22,820
	平成12年度選挙管理委員会交通費	42,300
	研究委員会助成金(40,000×3)	120,000
前受会費	2001年度以降年会費	7,779,854
積立金	INQUA積立金	300,000
	名簿作成積立金	600,000
	予備費積立金	4,000,000
合計		13,996,721

* 第四紀研究40巻3号、第四紀通信8巻3号、別刷・超過頁代

資料 (5) 2000年度業務委託費

(2000年8月1日～2001年6月30日)

I 会員業務費用	2,656,480	
1. 会員管理費	180,000	
2. 会費請求・学会誌等送付費用(年9回)	1,699,275	(2,085件×815円)
3. 新入会員登録手数料	51,800	(74件×700円)
4. 住所変更手数料	246,000	(410件×600円)
5. 特別請求書発行手数料(団体会員)	126,000	(105件×1,200円)
(賛助会員)	34,000	(34件×1,000円)
6. 追加送付手数料(中途入会等)	136,800	(1,368件×100円)
7. 多部送付手数料	1,975	(5冊×395円)
8. 多点送付手数料(会報同封送)	54,630	(10,926件×5円)
9. 学会誌保管費用	126,000	(7段×18,000円)
II 受付業務費用	320,000	
III 会計業務費用	468,000	
消費税負担額 5%	172,224	
合計	3,616,704	

資料 (6) 2001年度業務委託費見積

(2001年8月1日～2002年7月31日)

. 会員業務費用	2,502,475	
1. 会員管理費	180,000	
2. 会費請求・学会誌等送付費用(年6回)	1,711,500	(2,100件×815円)
3. 新入会員登録手数料	48,000	(70件×700円)
4. 住所変更手数料	120,000	(200件×600円)
5. 特別請求書発行手数料(団体会員)	126,000	(105件×1,200円)
(賛助会員)	34,000	(34件×1,000円)
6. 追加送付手数料(中途入会等)	100,000	(1000件×100円)
7. 多部送付手数料	1,975	(5冊×395円)
8. 多点送付手数料(会報同封送)	55,000	(11,000件×5円)
9. 学会誌保管費用	126,000	(7段×18,000円)
. 受付業務費用	320,000	
. 会計業務費用	468,000	
消費税負担額 5%	164,524	
合計	3,454,999	

2001年度総会議事録

日時: 2001年8月2日10時-12時

場所: 鹿児島大学教育学部101号大講義室

出席者: 70名, 委任状142通

議長: 吉川周作

大塚裕之大会実行委員長及び熊井久雄会長の挨拶の後、吉川周作評議員を議長に選出し、下記の報告及び審議が行われた。また熊井会長から、米倉伸之副会長が7月29日にご逝去されたことと、2001-2002年度の役員体制が報告された。

< 1 > 報告事項

1. 2000年度 事業報告

小野 昭幹理事長から評議員会議事録に掲載され

ている報告事項が報告された。この1年間の逝去会員に対して黙祷が行われた。

2. 2000年度決算報告・会計監査報告

福澤仁之会計幹事から別添資料に基づき決算報告があった。引き続き上杉 陽会計監査から予算の執行、帳簿・証券の整理などが正常適切に処理されていることが報告があった。

3. 研究委員会報告

出席している各研究委員会委員長から報告があった。

4. 日本学術会議第四紀研究委員会報告

町田 洋委員長から評議員会議事録に掲載されている報告事項が報告された。

5. 論文賞選考過程報告

小野 昭幹理事長から論文賞授賞候補者選考委員会の

選考結果の報告があった。

< 2 > 審議事項

以下の事業計画が審議され、承認された。

1. 2001年度事業計画

小野 昭幹事長から評議員会議事録に掲載されている審議事項が説明され、承認された。2. 2001年度予算案 資料参照

福澤仁之会計幹事から評議員会議事録に掲載されている審議事項が説明され、承認された。50周年に向けた行事を行うためにも予算的な裏付けが必要であり、会費の値上げが今後必要であることが会員から意見として出された。

3. その他の審議事項

- (1) INQUA2007年の日本招致に関して昨今の状況が報告され意見が交わされた。
- (2) 学会誌の著作権を守るためにも学会として今後どうすべきか 検討する必要があることが出され、幹事会で議論することになった。
- (3) 2000年11月に発見した旧石器時代遺跡・遺物の捏造問題に関して、学会として何かすべきではないか、という意見が出され、幹事会で検討することになった。

2001年日本第四紀学会論文賞授賞候補者選考結果報告

日本第四紀学会会長 米倉伸之殿

2001年日本第四紀学会論文賞授賞候補者選考結果の報告

論文賞授賞候補者選考委員会
委員長 松下まり子

第四紀研究第38巻、第39巻の論文を対象に、獨創性、論理性、発展性、学際性について慎重に審議した結果、次の2論文を授賞候補と決定しました。

青木賢人「¹⁰Be 露出年代法を用いた氷成堆積物の形成年代の測定」 第四紀研究、第39巻第3号、189-198頁、2000。

川村教一「香川県高松平野における沖積層の層序と堆積環境」 第四紀研究、第39巻第6号、489-504頁、2000。

同委員会委員：赤羽貞幸、小野有五、那須孝悌、松下まり子、春成秀爾

2000年度第8回幹事会議事録

日時：6月23日(土) 1400-1700

場所：筑波大学 学校教育学部

出席者：熊井久雄、真野勝友、斎藤文紀、鈴木毅彦、中川庸幸

欠席者：米倉伸之、中村俊夫、福澤仁之、竹村恵二、小田静夫、松浦秀治、奥村晃史、

報告事項

< 庶務 >

・6月23日午前に行われた評議員役員選挙結果について報告があった。6月25日に委嘱状が送付され、次期体制の準備が行われる。

・4月の会員移動の報告があった。

< 会計 > 文書報告

・会計状況は大きな変動はなし。

・会計監査は7月20日を予定している。

< 渉外 >

・2001年合同学会の第四紀セッションは約60名の参加で盛況であった。

・2002年の合同学会については今まで同様に国立オリンピック記念青少年総合センターを考えているが、7月末にならないと確定しない。

・地球惑星科学関連学会連絡会幹事に第四紀学会から鈴木毅彦渉外幹事が会計幹事として参加することが連絡会で承認された。

< 編集 > 文書報告

・次期編集体制に関して現在候補者を検討中。原則

として編集委員の任期を2期(4年)として、2期連続の委員は交代する方向で検討している。

・編集委員が全国に広がり、編集委員会への参加が必要集費が多くなることが予想され、学会財政を圧迫する可能性があることから、新たな編集方針を決める必要がある。

・投稿規定と編集規定に関して、内容の説明、原稿の長さ、書式、カラー化など、改定したほうが望ましい事項が多々ある。これらについては更に審議してゆき、可能ならば今度の評議員会に改定を提案したい。

審議事項

< 庶務 >

・日本地形学連合から第5回国際地形学会議(5th International Conference on Geomorphology)の後援依頼(2001.6.05)は承認された。

・九州大学溝口孝司氏から、「凶解・日本の人類遺跡」1992から14図を、溝口氏の著作「An Archaeological History of Japan: Self, Other and identity from 30000 BC to 700 AD」(University of Pennsylvania Press)への転載願いは引用明示を条件に承認された。

・NHK、NHKプロモーション、国立科学博物館主催NHKスペシャル関連企画「日本人はるかな旅」展(13年9月18日~11月11日)の後援依頼は承認された。

・東京都港湾局長からの「新版 東京港地盤図」への第四紀研究5巻3-4号、173ページの引用依頼は引用明示を条件に承認された。

・土壌科学小委員会への委員選出については、第四

幹事会議事録

紀研連委員となっている坂上寛一会員を日本四紀学会からは推薦することにした。

< 編集 >

- ・編集幹事から出されている編集規定などの改定については、更に審議することになった。

< その他 >

- ・次回会合は、新旧合同の会合とし、7月14日午後に行うこととした。この時に第四紀研連委員長の町田 洋会員へも参加を促すこととした。また次回に評議員会と大会資料の討議を行うので、7月10日までに庶務幹事まで送付することになった。

2000年度第9回幹事会： 新旧合同幹事会議事録

日時：7月14日(土) 13-17時

場所：筑波大学 学校教育学部 E233号室

出席：熊井久雄，真野勝友，齋藤文紀，中村俊夫，奥村晃史，鈴木毅彦，小田静夫，海津正倫，町田洋(四紀研連)，中川庸幸

欠席：米倉伸之，松浦秀治，福澤仁之，竹村恵二，山崎晴雄，小野 昭，宮内崇裕，河村善也，

< 報告事項 >

1. 庶務

- 1) 評議員及び役員選挙結果の最終報告が選挙管理委員長から会長宛に出された。選挙管理委員会では、互選により吉岡敏和会員が委員長に就任した。評議員選挙は全会員を有権者にして投票が行われ、5月19日の開票で46名の評議員が選出された。次いで新評議員を有権者にした役員選挙が行われ、6月23日の開票で、会長に熊井久雄、副会長に真野勝友、会計監査に坂上寛一、松浦秀治、幹事に鈴木毅彦、小野 昭、福澤仁之、山崎晴雄、小田静夫、竹村恵二の各会員が選出された。
- 2) 論文賞選考委員会が6月に開催され、互選の結果、松下まり子会員が委員長に就任した。委員会は2件の授賞者を決定し、会長宛の報告が出された。選ばれた2件は以下の通りである。青木賢人「¹⁰Be露出年代法を用いた氷成堆積物の形成年代の測定」 第四紀研究, 第39巻第3号, 189-198頁, 2000 川村教一「香川県高松平野における沖積層の層序と堆積環境」 第四紀研究, 第39巻第6号, 489-504頁, 2000
- 3) 5月の会員移動の報告があった。
- 4) 論文賞関連で大会に向けての準備状況が報告された。

2. 会計

- 1) 6月30日締め会計状況が報告された。2000年度の執行取りやめ分(予備費積立金等)と2001年度精算分(名簿作成関係費用)を除くと、おおむね予算通りであった。しかし、臨時的な収入を除くと、やはり若干の赤字傾向は否めない。今すぐ破綻するという状況ではないが、繰越金が徐々に

減少してきていることから、2002年度収支予算の計上にあたっては、会費の値上げを考慮しないとかなり難しい可能性が示された。

- 2) 別刷代の未納者については、昨年分までについては請求書を再送することになった。

3. 編集

- 1) 編集状況の概要、次期体制及び課題などが文書で報告された。

4. 行事

- 1) 大会準備状況が報告された。

< 審議事項 >

- 1) 大会資料について討議を行い、提出資料が一部修正で、承認された。
- 2) 次期編集委員会の体制案が示され、承認された。
- 3) 従来の編集内規は、現在編集規定として、内部資料として存在するが、5号体制の頃にまとめられたものであり、日本第四紀学会の内規集には組み込まれていない。このことから次期体制の中で内規集としてとりまとめて、2001年度第2回評議員会に提案する方向で準備することができるよう、今大会に提案することになった。
- 4) 大会議長、評議員会議長の候補者案が討議の結果出された。
- 5) 第四紀研連報告に関係して、INQUA日本招致のため会員への報告と会員から直接意見を聞くため大会で時間を設けることになった。その際の資料が討議され、承認された。
- 6) 学会事務センターとの来年度の契約内容が承認された。

2001年度第1回幹事会議事録

日時：8月1日 12時-13時

場所：鹿児島大学教育学部中会議室

出席：熊井久雄，真野勝友，齋藤文紀，中村俊夫，鈴木毅彦，松浦秀治，海津正倫，小野 昭，竹村恵二
欠席：米倉伸之，奥村晃史，小田静夫，中川庸幸，河村善也，宮内崇裕，福澤仁之，山崎晴雄

報告

- ・旧庶務幹事から米倉伸之前会長のご逝去とお通夜・告別式に関する報告があった。米倉前会長は8月29日午前9時頃ご逝去された。享年61才であった。お通夜と告別式は、駒込の西福寺で東京大学地理学教室の方が中心となり執り行われた。告別式では、鎮西清高日本第四紀学会元会長が弔辞を読まれた。
- ・鹿児島大会の進捗状況が報告された。
- ・2001年度総会資料の確認を行った。
- ・1月に開催予定のミニシンポジウムを12月号の第四紀通信に掲載するためには次回の幹事会で内容の概要を決定しておく必要があり、企画幹事に案を事前に作成しておいてもらうことになった。
- ・次回は、10月27日(土) 14:00-17:00 筑波大学学校教育学部で行うことになった。

編集後記：第四紀通信の編集とホームページ管理を担当する広報幹事が7月末で交代しました。本号は新幹事が海外出張のため旧幹事が引き続き編集しましたが、次号から下記の新しい編集委員会が始動します。過去4年間の通信はAdobe Publishing Kit, PostScript プリンタを使って見やすい誌面を作れたと思いますが、いかがでしょうか？写真や原稿をお寄せくださった会員の皆様、留守がちな幹事をサポートしてくれた広島大学文学部地理学教室の大学院生に感謝します。奥村晃史（広島大学大学院文学研究科）

第四紀通信に情報をお寄せ下さい

第四紀学会広報委員会

名古屋大学環境学研究科地理学講座 海津正倫

umitsu@lit.nagoya-u.ac.jp 〒464-8601 名古屋市千種区不老町

Phone: 052-789-2270 Fax: 052-789-2272

次号は11月上旬原稿締切-12月上旬発行予定です。

第四紀学会ホームページ <http://www.soc.nacsis.ac.jp/qr/> で、
第四紀通信バックナンバーのPDF ファイルを閲覧できます。